

多言語化される古事記

平 藤 喜久子

1. はじめに

古事記は1882年にイギリス人のバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain 1850-1935）によって英語に翻訳されたのを皮切りに、さまざまな言語に翻訳されてきた。フランス語、イタリア語、ドイツ語などのヨーロッパの言語だけではなく、中国語、韓国語、タイ語、シンハラ語にも及んでいる。また、英語やイタリア語のように別の訳者によって複数回翻訳されることもある。

今回、古事記を国際的、学際的に読み解いていくという試みがはじまるにあたり、あらためてその翻訳をリスト化することとした。出版形態にはさまざまあり、日本では入手できないものも多い。そのためすべてを確認することはできず、情報の漏れや不備もあるだろう。今後もデータを充実させ、また内容についての検討も加えていきたいと考えている。

2. 古事記翻訳一覧

年	言語	訳者	タイトル	出版社
1882	フランス語	Léon de Rosny	Koziki: Mémorial de l'antiquité Japonaise: fragments relatifs à la théogénie du Nippon	不明
1882	英語	Basil Hall Chamberlain	A Translation of Kojiki or Records of Ancient Matters	Transactions of the Asiatic Society of Japan X, LXXV.

1928	漢語・英語	Tsugita, Uruu (次田潤校訂) ; Basil Hall Chamberlain 訳	和・漢・英三文對録古事記. 神代卷: 附通俗古事記神代卷 (Wa-Kan-Ei sanbun tairoku Kojiki. Jindai no maki : tsuketari Tsūzoku Kojiki Jindai no maki)	世界文庫刊行会 (Sekai Bunko Kankōkai)
1928	英語	Isobe, Yaichiro (磯邊彌一郎)	The story of ancient Japan; or, Tales from the Kojiki.	Sankakusha (参画社)
1929	イタリア語	Raffaele Pettazzoni	La mitologia giapponese : secondo il i libro del Kojiki	Nicola Zanichelli
1938	イタリア語	Mario Marega	Ko-gi-ki : vecchie-cose-scritte : libro base dello shintoismo giapponese	Gius. Laterza & Figli
1939	英語	J. W. T. Mason	The Spirit of Shinto Mythol- ogy	Fuzanbo (富山房)
1940	独語	Kinoshita, Iwao (木下祝夫) ; Kuroita, Katsumi (黒板勝美監修)	Kozikī = Aelteste japanische Reichsgeschichte	Nichi-Doku Bunka Kyōkai (日獨文化協會)
1952	英語	Post Wheeler	The Sacred Scriptures of the Japanese	H. Schuman
1963	中国語	周启明 (Youhen Zhou)	The Kojiki in the Life of Japan	人民文學出版社 (Ren ming wen xue chu ban she)
1966	英語	Inoue, Shunji (井上俊治)	Kojiki	Nihon Shuji Kyoiku Renmei (日本習字教育連盟)
1968	英語	Donald L. Philippi	Kojiki	Princeton University Press
1969	仏語	Masumi Shibata; Maryse Shibata	Le Kojiki, chronique des choses anciennes.	G.P. Maisonneuve et Larose
1969	英語	R. W. Robinson	The Kojiki in the Life of Japan	The Center for East Asian Cultural Dtudies
1974	露語	Николай Йосифович Конрад	Японская литература : от "Кодзики" до Токутоми	Vostochnaia literatura
1979	中国語	鄒有恒 (Youheng Zou), 呂元明 (Yuanming Lü)	古事記 / Gu shi ji	人民文學出版社 (Ren min wen xue chu ban she)

1979	タイ語	‘Āthon Fungthammasān.; Suri Sansirikun.; Mahāwitthayālai Thammasāt. Khana Sinlapasāt.; Mahāwitthayālai Thammasāt. Naksu'ksā Wichā Phāsā Yīpun.	Kōchiki : tamnān kaokāe thīsut khōng Yīpun	Khana Sinlapasāt, Mahāwitthayālai Thammasāt
1979	スロバキア語	Victor Kurups	Kodziki: Japonske Myth	Tatran
1982	ハンガリー語	Kazar Lajos	Ko-dzsi-ki : régi történetek feljegyzései	Magyar Történelmi Társulat
1983	シンハラ語	Abaya Aryasinghe	Kojiki	Gurupura Press
1986	ポーランド語	Wiesław Kotański	Kojiki czyli Księga dawnych wydarzeń.	Państw. Instytut Wydawniczy
1987	韓国語	Sung Hwan No (노성환、魯成煥、 ノ・ソンファン)	고사기・上卷	Yejōnsa
1990	中国語	周作人 (Zhou Zuoren)	古事記 (Gu shi ji)	国際文化出版公司 (Guo ji wen hua chu ban gong si)
1990	韓国語	Sung Hwan No (노성환、魯成煥、 ノ・ソンファン)	고사기・中卷	Yejōnsa
1999	韓国語	Sung Hwan No (노성환、魯成煥、 ノ・ソンファン)	고사기・下卷	Yejōnsa
2005	ノルウェー語	Marcus Jacobus Teeuwen	Shinto: Japans eldste myter, i serien Verdens Hellige Skrifter, utvalg, oversettelse og innledende essay av	De norske Bokklubbene, Gyldendal 2005.
2006	イタリア語	Paolo Villani	Kojiki : un racconto di antichi eventi	Marsilio
2008	スペイン語	Carlos Rubio; Rumi Tani Moratalla	Kojiki: crónicas de antiguos hechos de Japón	Trotta
2011	フランス語	Pierre Vinclair	Kojiki: Chronique des faits anciens	le corridor bleu
2012	ドイツ語	Klaus Antoni	Kojiki : Aufzeichnung alter Begebenheiten	Verlag der Weltreligionen
2012	チェコ語	Karel Fiala; Denisa Vostrá	Kodžiki : kronika dávného Japonska	ExOriente
2014	英語	Gustav Heldt	Kojiki	Columbia University Press

3. 解説

① 古事記翻訳のはじまり

古事記のはじめての翻訳は、19世紀後半にヨーロッパで異文化、比較宗教への関心が高まるなかで行われた。詳しくは他所で論じたので、ここでは簡単に概観しておきたい。⁽¹⁾

18世紀から19世紀にかけて、西欧では自文化以外の宗教への関心が高まっていた。そこに登場したのがマックス・ミュラー（Friedrich Max Müller, 1823-1900）とタイラー（Edward Burnett Tylor, 1832-1917）である。宗教学の父といわれるマックス・ミュラー、また文化人類学の父といわれるタイラー。宗教へのアプローチの仕方は違ったが、いずれも本格的に開国したばかりの日本の神話へ関心を寄せていたことがわかっている。そしてそのいずれとも親しく交流していたのが、チェンバレンであった。言語学者でもあったチェンバレンは、本居宣長の『古事記伝』など日本の研究を参照しながら古事記に向き合い、英語に翻訳した。その翻訳は、直訳でわかりやすいものとなっており、ヨーロッパにおける神話研究、日本理解に貢献したいという思いにもとづくものであった。

同じ時期、古事記のフランス語訳を試みたのがレオン・ド・ロニ（Leon Lucien Prunol de Rosny, 1837-1914）である。日本を一度も訪れたことがなかった彼は、日本から送られた本をもとに、神代文字を用いて古事記の書き下し文を記し、さらに神の文字という連想からデーヴァナーガリー文字でも記した。このような工夫がなされた独創的なもので、独自の創造された古事記を築き上げたといえよう。

ロニの翻訳は現在ではほとんど顧み



レオン・ド・ロニの古事記

られないが、チェンバレンについては、いまでもその影響力を保っているといえるだろう。イザナキとイザナミの性交の場面などは、厳しい倫理観が求められたヴィクトリア朝という時代を反映してか、ラテン語で訳されている。こうした時代の制約はあるものの、このあと刊行された翻訳のいくつかは、チェンバレンの英訳からの重訳となっていることは、その影響の大きさを物語っているといえるだろう。

〔チェンバレン古事記〕

Having descended from Heaven onto this island, they saw to the erection of a heavenly august pillar, they saw to the erection of a hall of eight fathoms. Tunc quaesivit [Augustus Mas-Qui-Invitat] a minore sorore Augusta Femina-Qui-Invitat: "Tuum corpus quo in modo factum est?" Respondit dicens: "Meum corpus crescens crevit, sed est una pars quae non crevit continua.".....

② 古事記翻訳の方法

これまでの翻訳をしてみると、その翻訳の方法には複数のパターンがあることがわかる。一つは、チェンバレンのように翻訳者が直接古事記に向き合い、日本語の研究書を参照しながら翻訳していくという方法である。チェンバレンのほか、1938年イタリア語に翻訳したマレガや1968年の英語に翻訳したフィリップイ、そして2012年にドイツ語に翻訳したアントーニなどがそのようにして古事記と向き合い、研究的ともいえる翻訳を出版している。

ほかには、ある翻訳をもとにし、それをまた別の言語に翻訳するという方法がある。1929年のペッタッツォーニによるイタリア語訳は、チェンバレンの英訳をもとにした。同じく2013年のフランス語訳もチェンバレンの英訳がもとになっている。

日本語の現代語訳をもとにして、そこから翻訳をするというやり方もある。魯成煥による韓国語訳、また2014年の英訳は、小学館の新編日本古典文学全集『古事記』の現代語訳を底本として訳されている。また、タイ語の古事記はポプラ社の古典文学全集『古事記物語』（高野正巳編）をもとにした訳となっている。

③ 古事記翻訳の課題

2014年にヘルトにより、新しい英訳が刊行された。チェンバレン、フィリッパイに続き、日本研究者による学術的な英訳として注目される。チェンバレン、フィリッパイいずれも優れた日本研究者であるが、古事記の翻訳に関して言えば問題がないとはいえなかった。

たとえばチェンバレンの古事記は先に述べたように一部にラテン語を含んでいる。そして、神名や地名などの固有名詞の多くが漢字の意味を翻訳するという形になっている。天照大神であれば、チェンバレンはHeaven-Shining-Great-August-Deityとする。大国主神はThe Deity-Master- of-The-Great Landである。神名の表記については、必ずしもすべて漢字の意味が重要な意味を持つとは限らない。また古事記をこれから学ぼうとするものにとって、「アマテラス」という語になじむ方がHeaven-Shining-Great-August-Deityで知るよりも有益ではないかと考える。

フィリッパイの翻訳では、天照大神をAMA-TERASU-OPO-MI-KAMIとする。大国主神はOPO-KUNI-NUSIである。これは上代語の音韻にこだわった表記である。上代語の音韻を再建しようという問題意識がある場合、ローマ字化する際には、その研究成果を反映したいと思うのは当然であろう。しかし、初学者には現代の日本語の音韻で学ぶほうがよいのではないだろうか。将来的に学生が日本で学習する可能性を考えてもそうだろう。上代語の音韻が現代日本語のそれとは異なっているという話は、その次のステップの学習で十分ではないかと思う。

このようにチェンバレン、フィリッパイの翻訳は優れているものの一長一短があり、著作権が切れ、アクセスが容易であるという点で、チェンバレンのほうがより活用されているという状況であった。そこにヘルトの英訳が刊行されたのである。

ヘルトの翻訳では、神名の表記について、天照大神はHeaven Shining、須佐之男命はRushing Raging Manとなっている。日本語のアマテラス、スサノオに相当する部分を訳したということだろう。チェンバレンよりは読みやすいといえる。だが、安万侶をCalm Fellowとしている点は、かえって

わかりにくくはないだろうか。日本人の人名は、たしかに漢字の意味も重要であるが、音を重視して決めている場合もあり、かならずしもどちらかに決定できるものでもない。

ヘルトの翻訳で注目されるのが神を Spirit と訳している点である。チェンバレンは Deity と訳した。ほかには God と紹介するものもある。Spirit という語は、一般には精霊という意味合いが強く、ギリシャ神話の神々のように多神教の人格神的な神々は Deity とあらわされることが多い。はたして日本の神は Spirit だろうか。Deity だろうか。もちろん違う文化の言語に訳する際に、差異が生じるのは当然である。Spirit でも Deity でも「神」に完全に対応するわけではない。では、ほかの文化の人々に「神」を理解してもらうとき、それをどのように伝えるのがいいのだろうか。そもそも日本人の研究者の間で「神」について共通理解はあるのだろうか。古事記研究者たちのなかで、「神」概念について、十分な議論はなされているだろうか。ヘルトの翻訳は、あらためてこの問題を論じる必要性を提示しているように思われる。このように外国語への翻訳という観点から古事記をみることで、あらためて日本語の問題が課題として問い返されることがある。

4. おわりに

古事記の翻訳は、海外の古事記研究の展開に資するだけではない。1300年前に記された古事記は、日本人にとっても異文化であるという側面も持つといえるだろう。130年を越える古事記翻訳の積み重ねは、外国人が異文化である日本の古代文化を理解しようとする挑戦の歴史でもあった。現代の日本人の古代文化理解にも参考になる点が多いと考える。また、神の翻訳の問題のように、翻訳された古事記をみることによって、日本の研究にどういう点が足りないのかが明確化されることがある。上代語の音韻の問題も、ローマ字化することによって日本語での研究以上に大きな意味を持つことになる。

古事記の研究を国際的に展開し、発信していくには、これまでの翻訳をより詳しく検討していく必要があると考える。

註

- (1) 平藤喜久子「外国人が見た古事記—130年目の古事記—」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第5号、2014年3月。pp.92 (33) -78 (47)

今回の翻訳リストの作成にあたっては、一橋大学大学院間永次郎氏にご協力いただいた。記して御礼申し上げる。